

大阪大学図書館報

大阪大学図書館報は、大阪大学図書館の業務の発展と、図書館界の発展に貢献することを目的として創刊された。本報は、大阪大学図書館の業務の発展と、図書館界の発展に貢献することを目的として創刊された。本報は、大阪大学図書館の業務の発展と、図書館界の発展に貢献することを目的として創刊された。

Vol. 19 No.5 & 6 Mar. 1986 (昭和61)

目 次

- | | |
|------------------------|------|
| ○これからの図書館 | ○日 程 |
| ○文献情報センター・タスクフォースに参加して | ○人 事 |
| ○大型コレクションの目録二つ成る | |
| ○教官著作寄贈図書 | |

これからの図書館

高 澤 格 雄

昭和61年の年明けと共に大学図書館界は大きく変貌しようとしている。多年研究（教育）者および大学図書館職員が喝望してきた学術情報システムの本格稼動が目前に迫り、情報化元年の幕明きとなりつつある。昭和55年1月、学術審議会から「今後における学術情報システムの在り方について」文部大臣に答申が出され、爾来6年間にわたり、調査開発、システムの研究と構築、実験的試行等の過程を経て、組織としては昭和58年4月東京大学情報図書館学研究センターの改組転換による東京大学文献情報センターの設置、更に昭和59年全国共同利用施設に改組、本年4月には学術情報センターの創設が予定され、着実にしかも堅実に進展してきている。このような時代の趨勢を踏まえ、大学図書館の抱える若干の課題について触れてみたい。

先ず第一の急務は学術情報センターを中心とした大学図書館間のネットワーク化の早期実現である。近年の学術情報量の増大はすさまじいもので、例えば昭和48年度末と昭和58年度末の国立・公立・私立を併せた大学図書館の蔵書量を比較すると、図書では約7,652万冊が1億3,174万冊と172%増加し、雑誌では104万種類が184万種類と177%増えている。このように膨大な量の増加は研究（教育）者の研究の多様化、多角化、専門化と共に学際化、更には国際化に伴うものであり、もはや1大学図書館では対応できる限界を遥かに越えており、学術情報資源の相互利用、有効活用ひいてはデータベースによる共有化へと発展せざるを得なくなってきている。従って1日も早く電算機によるネットワーク化の完成を鶴首して望む次第である。

次に、段階的にせよ逐次ネットワーク化が進むにつれ、図書館が取り組まねばならぬ業務は、それぞれ自館の図書・雑誌の目録・所在情報の入力——すなわち学術情報センターへの

登録である。当初は取り敢えず現時点以降の資料を対象とすると思うが、必ずや将来において過去の資料の遡及入力が必要となろう。また、入力に当たっての書誌の品質管理をどうするかも検討を要する問題である。

更には、文献情報センターにおいてほぼ開発が完了した学術雑誌総合目録の欧文編・和文編のデータベース等を利用しての大学図書館間相互貸借システムが稼動することとなり、オンラインでの文献複写等の依頼とファクシミリ等による伝送が一層合理的にしかも迅速に行われるが、大学図書館においては1次資料の収集・蓄積・保存の体系的整備が必要となる。現在、本学中之島分館も含め国立8大学図書館に置かれている人文・社会、理工学、医学・生物学系の外国雑誌センター館の役割と責任はより重大となろう。ILLに関連して国公立大学図書館協力委員会でも鋭意検討を続けている国公立間の料金の調整と精算方法についての早期解決も望まれるところである。

また、各大学図書館固有の問題としては、電算機を利用した効率的なハウスキーピング業務の策定・開発・維持とこれらを推進する要員の確保、養成が重要かつ緊急事である。中長期的にはそれぞれの大学図書館の総合目録の維持の仕方——冊子体とするか、カード形式とするか、或はカードレスによる蔵書マスターファイルか、これらの併用によるか等の問題や、複数のサービスポイントをもった比較的大規模図書館の組織・機能について集中か分散かの問題に真剣に取り組まねばならぬ時期も到来しよう。

最後に、本学附属図書館は、昭和61年度中に吹田分館（将来構想では工学系図書館）の増築が予定され、また、中之島地区の医学部・附属病院施設が数年中に吹田地区へ移転する計画が着々と進行中であり、これに伴って医学・生物学系外国雑誌センター館にもなっている中之島分館（将来構想では生物系図書館）も移転することとなるが、教職員並びに学生各位のご理解とご協力をいただき、21世紀に向っての立派な図書館の建設に全力を尽くしたいと念願している。

（たかざわただお 事務部長）

文献情報センター・タスクフォースに参加して

整理課洋書目録掛 伊藤 彰

昨年4月から約6カ月間、東京大学文献情報センターのタスク・フォース（特別研修）に参加しました。

東京大学文献情報センターは、その前身である東京大学情報図書館学研究センター（昭和51年5月発足）の改組転換により昭和58年4月に発足し、現在は全国共同利用施設として活動していますが、今年の4月からは学術情報センターとして独立し、将来の「学術情報システム」の中核機関たるべく、その実現にむけさらにサービスを推進することが期待されています。学術情報システムとは、「大学等におけるすべての研究者に、分野を分かつ高品質の学術情報を提供しようとする全国的な情報ネットワークシステム」で、「学術研究に必要な情報環境とコミュニケーション環境を情報処理技術、特にデータベース、ネットワーク、

及び知識工学の最先端技術を踏まえて提供」しようというものです(センター要覧1985)。この学術情報ネットワークは学術情報センターを中心に、全国の大学等の図書館と大型計算機センター等により構成されます。センターの役割りには、システムの計画と調整、学術データベースの形成とそのサービス、全国的なネットワークシステムの推進等がありますが、当面文献情報センターでは、全国の大学等の図書館に所蔵されている図書と雑誌の書誌・所蔵情報に関する総合目録データベースを構築し、これを使って目録・所在情報サービスを提供することを目的にしています。

私が参加したタスク・フォースは文献情報センターが行う教育プログラムの一つです。タスク・フォース(task force)とはもともと軍事用語で特殊任務を持った援助部隊のことでありますが(horseではありません)、センターでは特別研修員の呼称として使っています。この研修への参加者は、センターとネットワーク接続(または接続予定)している大学図書館から一定期間併任・派遣の形でセンターに滞在し、センターの一員としてシステムやデータベースの構築・運用・拡張等の業務に従事しながら研修を行い、各大学に帰った後はそこで獲得した知識・能力を図書館での電算化・ネットワーク化に生かすという任務を持っています。

昨年は大阪の他、弘前、東北、千葉、京都、徳島、琉球の各大学から参加者がありました。行った業務は、(1)学術雑誌総合目録欧文編新版の全国調査準備作業と、(2)文献情報センター・目録システム関係が中心でした。(1)は昭和63年に本版刊行予定の学総目録欧文編新版のための全国調査準備作業で、具体的内容は、①現行データベース(自然・人文社会・補遺三編を統合化したもの)の事前調整(補遺版以降のNew titleのLC-MARC(S)からの取り込み、ロシア語等キリル文字誌の原綴化、重複書誌の調整・変遷関係のきりわけ等三編統合化作業の後整理)、②予備版(本編・別編・誌名変遷マップ)の編集・印刷、③全国調査に使用する各種データシート(設計・印刷と現行データのプレプリント)、④データ記入要項の作成・印刷、⑤調査機関(参加組織)の調査及び連絡管理システム作成、⑥個別版磁気テープ及び所蔵データ提出磁気テープの仕様作成等で、各作業は班編成による分担で行いました。(2)は昨年4月から実運用を開始した目録・所在情報サービスに関するもので、①目録システムのチェック(実際に端末を使ってのチェック及び時差更新結果リストによるデータ内容・記述文法・システム等のチェック)、②オンライン目録システム端末オペレーションマニュアル(目録システム講習会で使用するもの)の作成、③接続(予定)図書館の目録担当者を対象とした目録システム講習会の実習指導、④センター見学者等への目録システムのデモンストレーション、⑤目録情報の入力基準(検討案)に関するアンケートのまとめ等です。他に、(3)学総目録和文編新版(近く刊行予定)のデータチェックと校正作業も行いました。これらの作業を進めるかたわら毎月定期的にタスク・フォース研修会を行い、作業内容・進捗状況等について報告・討議を行い、さらに各自の所属部局へは、その月の業務報告を提出しました。

半年の短期間にかかわらず業務内容はかなりハードなものでしたが、学総目録事業という重要なプロジェクトに参加できたこと、また文献情報センター目録システムの実際に触れ内容の理解を深めることができたこと、さらにセンターをはじめ他の大学図書館等との人的なネットワークを形づくることができたことなど、不断の業務からは得られない貴重な経験でした。これからこの研修の成果をどう生かすか、前途多難な我が大阪大学の目録システムの実現のためがんばらなければと肚を据えています。

(いとうあきら 整理課洋書目録掛)

—大型コレクションの目録二つ成る—

去る57年度から2年度にわたって文部省大型コレクション購入費により購入された「古浄瑠璃」が、「赤木文庫（古浄瑠璃）目録」として、昨年、3月に刊行された。総数100点のこの文庫は、中世文学・近世文学・演劇芸能・国語学等の資料として研究に欠かせない稀講書である。本目録は、古浄瑠璃を中心とする旧赤木文庫の書誌解題目録である。

次に、54年度に購入した「ユダヤ研究（Judaica）コレクション」が、昨年12月、「ユダヤ研究（JUDAICA）コレクション図書目録」として発行された。これは、購入当初、簡略な目録を配布し、後日、本格的な目録をと、その完成が待たれていたものである。本コレクションは、1850年から1970年に至るユダヤ関係出版物の総合的集成であり、ドイツ語文献を中心に、英語、仏語文献を含む、約4,000点に及ぶ貴重な研究資料である。

教官著作寄贈図書

——本館——

原田 敏丸（経・教授）
宮本 又郎（経・助教授）
歴史のなかの物価

（同文館 昭60）

波田 節夫（言・教授）
初期ゲーテとヴィーラント

（中西印刷 K K 昭60）

——吹田分館——

都市の時代：

— 京都・大阪・神戸からのアプローチ
— （都市文化社 昭60）

——理学部図書室——

浜口 浩三（理・教授）
タンパク質分子

（岩波書店 昭60）

■■■■■■ 日 程 ■■■■■■

- | | | |
|------------|----------------------------|---------|
| 60. 11. 12 | 生物系図書館ワーキング・グループ第4回会合 | （中之島分館） |
| 60. 12. 2 | 第37回近畿地区医学図書館協議会例会 | （近畿大学） |
| 60. 12. 9 | 吹田地区運営委員会増築小委員会 | （吹田分館） |
| 60. 12. 10 | 生物系図書館ワーキング・グループ第5回会合 | （薬学部） |
| 60. 12. 16 | 第21回大学図書館国際連絡委員会総会 | （東京大学） |
| 60. 12. 16 | 国公立大学図書館協力委員会文献複写委員会（第36回） | （関西大学） |

■■■■■■人 事■■■■■■

(採用)

60. 9. 1	山下 雅子	事務補佐員整理課受入掛
〃	山崎 典子	〃 和漢書目録掛
60. 12. 16	今枝 エツ子	〃 〃

(昇任)

61. 1. 1	三宅 輝久	閲覧課参考掛文部技官から東京大学大型計算機センター システム管理掛長
61. 1. 1	後藤 登	医学情報課受入掛文部事務官から神戸大学附属図書館医 学部分館整理運用掛長

(辞職)

60. 12. 31	稲泉 美保	閲覧課閲覧第二掛 (併任) 文部事務官
60. 11. 16	吉澤 道子	整理課和漢書目録掛事務補佐員
60. 12. 28	杉本 雅美	医学情報課受入掛 〃
〃	高楠 万里	〃 運用掛 〃